

## 独自路線でインバウンド客獲得

和歌山県の平成29年「観光客動態調査報告書」を見ると、昨年一年間の県内宿泊客数は全体で約516万6千人、外国人宿泊客数は47万6千人で、それぞれ前年比で1.5ポイント、4.9ポイント減少した。この数字からは、インバウンド需要で、今もホテルの建設ラッシュが続く大阪府と隣接していながら、和歌山県はブームに乗り遅れているように見える。しかし、どうやら実態は異なるようだ。昨年、世界的旅行ガイドブック『ロンリープラネット』が「Best in Travel 2018」の訪れるべき世界の10地域を発表。日本で唯一、紀伊半島がベスト5入りした。紀伊半島には、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」があり、その中心地の一つ高野山では、外国人宿泊客数は84,333人で前年比110%と増加している。熊野本宮温泉郷でも21,133人と過去最高を記録した前年をさらに上回るなど、世界遺産エリア内の観光地はどこも外国人宿泊客を増やしている。和歌山県のインバウンド政策上、世界遺産がキーコンテンツであり、紀伊半島が内包する歴史、自然、スピリチュアルな魅力が外国人ウケすることは間違いない。これらのコンテンツは欧米や豪州、さらに近年では香港からの観光客に人気が高い点が、中国や韓国人観光客が中心の他府県とは一線を画している、県や県観光連盟が売り出しに注力する日本遺産ストーリー『鯨とともに生きる』（新宮市、那智勝浦町、串本町）、『絶景の宝庫 和歌の浦』（和歌山市、海南市）、『「最初の一滴」醤油醸造の発祥の地紀州湯浅』（湯浅町）、『「百世の安堵」～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～』（広川町）も、和歌山ならではのインバウンド施策の一翼を担うはずだ。

しかも、和歌山の魅力はそれだけではない。今年10月、国内最大級のファッションショー「アマゾン・ファッション・ウィーク東京」に参加したフィリピン出身のデザイナー達が日本を離れる前に和歌山を訪れた。コンピューター横編み機の世界No.1メーカーの「島精機」や生地製造の「エイガールズ」を視察。繊維や生地、縫製技術の高さに驚き、最終製品に触れて「それら（機械や技術）をすべて買って帰りたい」と語ったという。また、県では「医療観光」の研究にも着手し始めている。単なる名所の観光や買い物だけではなく、ビジネスや医療までをもテーマにした和歌山県のインバウンド施策に、引き続き注目してみたい。

産経新聞社大阪本社 メディア営業局 企画開発部長 根来隆昭